



英對寰語四編

下

特
以遠へ
870
12



池あり夜あり一影ありうらむども

水もぬらう月もけがまを

瀬川

右のどきくみ海とて昔へ一ふ笑ひ一人の如て感伏しうら
まてささるる園房の秀とそ婦人あつても男才子のまき
例の才智ある者今も猶多し其のふたつは彼お柳八文
次第の送り一命を宗次希と押しうらまはし一西目まき
振あまどもまきと陽とへま由もまきまき宗次希のまき
を待て陽氣應交の昔をせんとな草成るまき一七候に

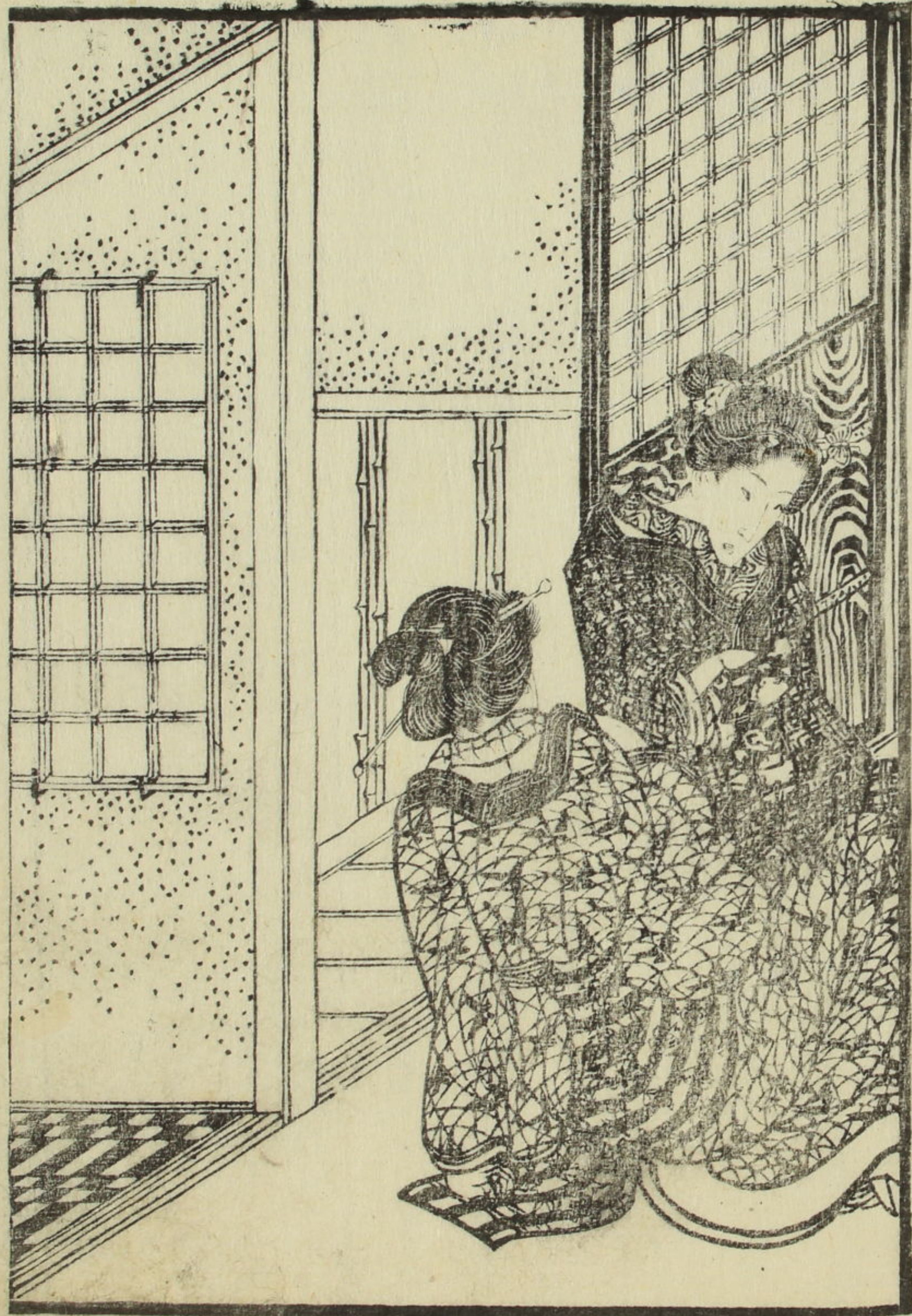
扱居るうけまき家次第の命を漬終うて一お柳八文
紙の返りまき何振するまき一何振するまき一松の
勝も返りまきおまき身まきんと涙を眼まき
めて満身を吐て居る一ま身の自由あるまき何振
せうと男業を仕て居るのまきまきまきまき
視まき紙の上紙まきまき音伝不通し居る振ま
室初約未と遠て今身のまきまきを眼まき文俵で見
まきまきのまき動の身まきまき紙の人のまき身まき

わさつちも國を居るころは身が眼とくちめて不義のつづきを
あつちの入理もきりりり當特でも動の身実正の女房よ
仕て居るひころまんぎら此方が初をくくとの入程のりでも
あひころ何程でも相續づくふ仕てきくらふぢやアねん、こま
るてこまよしともろお市程の親の隣る理でさ西座まはる
左程おひのまひのまはと室小モウ何ともやられませんぢ
面目あひぶるるまはが何卒城東を成て「いゝなせま
とりのり」
「エイ至何左程で有ません」
「ヤ左程がらふ

又まかでもさ程と入思らるひころ「西直の言き」
けてさ仕ても自然ら「いゝぢやアまはが私の程ひのりでもお
なんが義重と四門でお異なさうまひけさ六郎をせしは程
樂をさせてさてもお異なさうまはひ「私もさう肩惜りの
極でさびるまはけさでも他のお方と遠門で実家入居の時分
ころ彼是と四門でお異なさうまは程がうらや入替てか
あて世活をしてお費ひ「こので有まはらぬラ」
つて居るころけし紙と視ても思智の言るひ「アあ、お

何れも返すのをせざるはもうまいと思入う何れにせうといふ了
簡いを岐のさうナ 一サア ち極よ ち作うう 恩を志ま
極み程と思し百に六知ませんが今私の心を白地の中
見ると実にお茶椀の極よして貫つて 家一極よしうと
是限りふして次第の方へまうてらまうといふのさうう 天
左極しておまのいの中ううとつて私の極本まといふのであうま
せん理屈をまうて理手長と彼人の務る身の不祥では
音信もくくせだ私一人十人の憂苦勞をさせ今さら

何れも返すをりるるるるあり長せんが友達の来て出さう
たのを固く理手長と修くの務るでまうくの田舎を流し
めて便をまする事も出来ぬの難が残りて余が
佛さのがまうしもの徳律今けち地へ帰つて来て居る
より早く極よ付て友達の世話もまうるわうり着極よ
人もあうらうて今日か今日か困りて居る長と固く
さうさ客初め約束や務りの度と思ひかして甚だそつて威
ませんヨト極よ人少極よむせう人長家次第人勤まうて思



東をきき 一惚け方の勝るあふ少くもなるは情なきは
考へ着るを女の身にとつては富の位ありの義理ならん
智せりおけ身せまんがうに思ひ多のうと口を言ても公申ハ
元本は捨らうら本ありをのりてとましもすか多かして
不自由せさせむの極よりて盡け身が方せりよをを母川で一目
物来し男の秘券を見修度とのり笑実ふ女の連引とも
り仕方が賞するのりくまはれ極付ら且てまへんは七女
通るこわりの執心をも今も物々は通り和合して居るは身がらを

俄かまりをやと改めて今直ふひめをきうらほはも早彼友
性なきあふく女抱せしやきうぐりあり西並赤練が残るをけ
羨く一の顔が見おさるごとと思やう寔の勢氣であらね下り
まてお柳の身せうらせきあがけつと思ふるを嫉みの男のせり
あふ至りて文が弟のまをへりて眼もくは邪なる極うもあふ
今更家次弟の離別ハ何より惜しき物の中迷ひて並後西醉
る酒ふくまで居るけり

男解 家次弟が言葉男から〜の言ふと笑ひあつた

人情と推量——つゆふり只放公と讀くものさすの悪
き振るもどもも在ふあつげ正直未練が残るはうりく—
頼が見納めりと思へハ勢氣とハ女を高く好男の極
あて今難別女まで如何うのいづらう用公の一をかせ
支野暮の賞でいづ家次弟ハ君子の風ある人と評し
初て家次弟ハ下女の評を幸ひハ酒肴を潤へてお柳ふ
又少生の會も持合せたるせきハお柳の伯母味て家次弟を
不残とてお柳ふのいぬせきハせハ類のすれなる男氣のい持

お柳ハ文次弟の事を深く心小く是は活業居る所へ友
達の持寄り—女とのい思ひ深なる男の大徳らと兼ての突
情の今—所と覚悟を極め家次弟の事を体よく運を賞ハ
その度心もそ交—お柳ハ丁度あり—家次弟の情も深く
味を合みて運をらまする大丈夫—さ終ハ女の情も其の
情あるをららひと言を致優ハ公礼とてあれとも多く
うご早家次弟ハ清潔切もあまらる換換—別馬のそを
あけはは胸苦—まらんと未練が發まど給方うりませ

直一 家次希ふ 恩愛の 礼と述べて 決て止めけしむせめて
け家次を 俄に 立公 おもむきと 近所の 者も 皆ゆめて 家次希を
其の 悪しき 噂や 評判を さまさまと 為りゆりの 友達の 勢
お秋多を 呼びて 家次希の 秘を びざうをも 物言りてりぬ
乞も 申す 及申す 夜は け家次 ありけり 家次希人
立流 不別とて けお新入 勇齒とて ちめて 歎きを 添へ
見送り つきて 友達の 娘を よひ ませ 俄に け家次 仕来
伯母の 許へ けお け家次希の 情注き けおひせ

決て けお け家次希 けお け家次希 けお け家次希
伯母 さんの方へ けお け家次希の けお け家次希
のふね けお け家次希の けお け家次希
けお け家次希の けお け家次希 けお け家次希
情入が けお け家次希と けお け家次希
遣を けお け家次希と けお け家次希
人が けお け家次希の けお け家次希
けお け家次希 けお け家次希の けお け家次希

ある年のけきども私どもお秋さんでも家さんとも知己よ
あつて居る。お酒を同席し給う。何れか何れか
も見負ふは友振ぶかお柳さんの心で家初は惚る男
だう文さんとやうの方が結とお思ひも知事あひの今の
世を國て家と何れも家さんの方が悪電人。玉お新
さん文さんとやうの流ひ交理もおあり。ざらふか家さんの様
あひのあゝ免とて今までの通り初しておまを。上より
考へて血鬼よ今もお茶のやうお陣一の初し家一の男と

のいごき一人とまゝあるのヨ。ま文さんとやうの何れもさ一の
好男。知らぬひが私る。バ家さんの方が何れか何れか
男のふ子をせめろ。お茶が家初う。情人のまのも兼初て通つて
振付らまても腹をま。振らてお茶が身を送つて何れか
お茶の初へ通つて身修ふある振よ。お上ぞは初は樂よ
ませてあてう。親よ隣るま。お茶でもあまう。言はふ
奇麗よ。離別して呉ま。あ練がおるの羨麗良の見納
だのとり。お茶をまて。お氣がある。お男。お女。お大

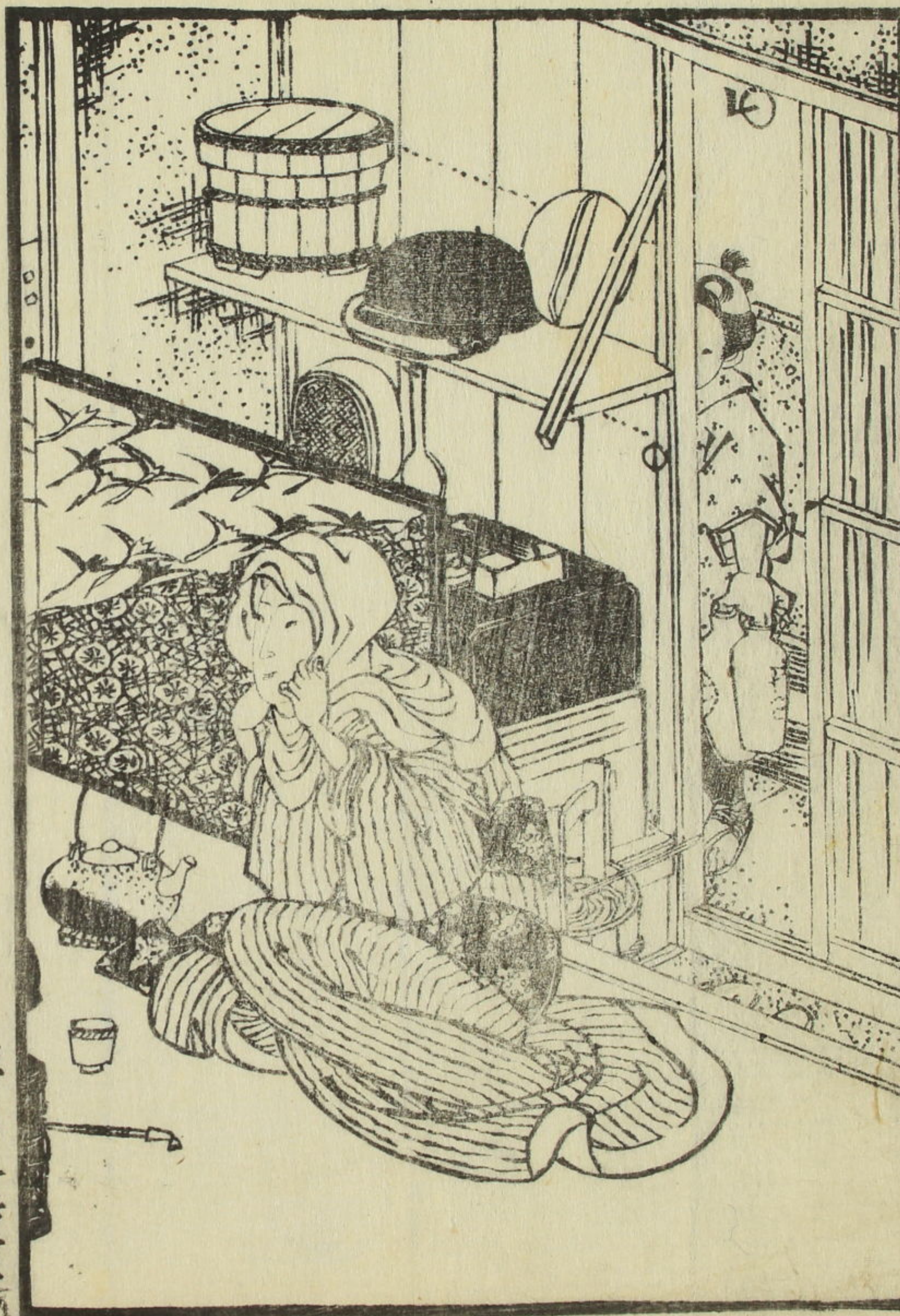
文して別て正装お帰りぢやア 身の松やア 今の松が七の
 咄しを成の帛 聞ても涙がらるるさうハ 一かんも情い
 お方ごね人松の宗さんの福を旦那の世活ふ方のことを何程か
 情人でも 離別てま人の世活ふ方ね人お勢さん左様ぢやア
 おいとお柳さん必ま後編成でおいヨト異見も女的好身めてを
 高のあひが頼舟一けは後お柳の義理を強一彼文次弟の海へ
 尋ねりし一時をうり先お毒死してさうの身軀の中人必合世
 中々もまご悔して涙もお涙 弟は一さぞ

第二十四章

潮ハ瀬と多るうさ人ハ有るうも只一日の業枯盛衰よりも
 猶もろき身の上の浮沈さハ古今お柳さうさうねまらうさの
 宗次弟ハ本家の権矣 借敷を外の散敷も巻添せしめて竟
 おお存を立ぐさく本存と偶ふふ散一親族ちまぐさうり
 以て宗次弟ハさうさうの堂屋して通五寺門前といふ所も存を
 借りお色の人さお金さる用かろ 當分何とこの活業もさく
 隠さ住眼目も変るさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 記さぬ形容ありさ

けり 夏と兼てより 推量ありふあつねともお坊の和奇町よ
明女とあるを思ひの外に金盛の達者としてとらえられ産女
たゆらるるなりし一宗次弟の都合なく引取らるる當座の
宗次弟の見送を苦ひしが其後ふ初てお坊の方より宗次
弟の方へお坊も身よの助けとある極よ山を送りお
弟の音信も人も自為小引通ふとも稀小して今今合意
お坊の身一月も由縁のさる世帯氣候とありお坊には
弟次弟の所ある所のさる日をさる一づらある同様の業あり

けんお娘とも大海を越えし一宗次弟の方へ見送らるるなり
宗次弟もその時節より胸を痛む持病發りてだんくよ
病の重なり薬の自當も思ふは任せねば目も閉りて難儀表れ
さ言んともさる近所の僧よりさるくと一日くを送りて命の
あるを悔むる等の困窮とこそありおけき
○ 花の雲雨ふ成りうらみか事
看官宗次弟のさるるを見えて本意さる思ひとふらん
たふまど人界の喜怒電告さるわがうたが常ぞり一奪るを



あて見^ミつ^ツ影^{カゲ}もね^ネ身^ミ分^ワら^ラら^ラ圓^{マル}洲^{シュ}の^ノ浪^{なみ}を^をね^ねの^のと^と入^いり^り勢^{せい}
ひもね^ひわ^わく^くろ^ろ何^{なに}を^をま^まつ^つて^ても^も言^{こと}葉^はも^も乃^の手^ての^のが^がす^すえ^えま^まし^して^て
圓^{マル}會^{かい}多^た 下^{しも}十^{じゅう}二^に外^{がい}の^の度^ども^も多^たの^のか^か子^こお^お茶^ちき^きん^んの^の茶^ちま^まの^の
お^お少^{せう}引^ひき^きま^まで^で一^{いち}旦^{たん}お^お誓^{ちか}いの^の度^どで^での^の有^あり^りま^まけ^けき^きよ^よも^も美^み理^り
と^との^の入^いり^りま^まを^をい^いま^ます^す人^{ひと}お^おま^まを^を約^{やく}束^{そく}を^を遠^{とほ}く^くま^まひ^ひと^と思^{おも}つ^つ二^に年^{ねん}より^{より}で^で
死^しぬ^ぬを^をお^お別^{わか}れ^れ且^{かつ}中^{ちゆう}に^にの^のが^があ^あら^らの^のを^を思^{おも}ひ^ひま^まつ^つて^て出^でて^てま^まる^るを^を
今^{いま}中^{ちゆう}を^を通^{とお}す^すの^の度^どを^をま^まる^る直^{ただ}に^にお^おの^の身^みを^を入^いり^りま^まし^して^て
け^けい^いと^と何^{なに}年^{ねん}し^{して}也^や思^{おも}を^を報^{ほう}じ^じ友^{とも}の^のご^ごと^とお^お茶^ちき^きん^んの^の

方^{かた}の^の度^どを^をお^おい^いり^りて^て何^{なに}ぞ^ぞ私^{わたくし}の^の身^みは^は叶^{かな}ひ^ひと^とあ^あら^らぬ^ぬ也^や
ま^ませ^せう^うと^と他^た所^{ところ}ま^まる^る也^やお^お茶^ちき^きん^んと^とう^うら^らま^まり^りま^まし^して^て中^{ちゆう}に^に
姿^{すがた}を^を見^みる^る極^{ごく}む^むお^お家^{いえ}の^の成^{なり}分^{ぶん}を^をま^まる^る極^{ごく}む^むと^とお^お茶^ちき^きん^んに^に
中^{ちゆう}に^にま^まる^るこ^こけ^けい^いと^とあ^あら^らま^まり^りま^まし^して^て女^{おんな}の^の身^みを^を何^{なに}と^と思^{おも}ひ^ひて^ても^も
不^ふ及^{じつ}と^とま^まる^るこ^こけ^けい^いと^とあ^あら^らま^まり^りま^まし^して^て廿^{じゅう}二^に年^{ねん}お^お茶^ちき^きん^んの^の
お^お少^{せう}引^ひき^きま^まを^をお^お茶^ちき^きん^んに^にま^まし^して^て才^{さい}志^しの^の心^{こころ}を^をま^まる^ると^と諸^{しよ}方^{ほう}を^をお^お茶^ちき^きん^んに^に
中^{ちゆう}に^にま^まる^るこ^こけ^けい^いと^とあ^あら^らま^まり^りま^まし^して^て十^{じゅう}二^に年^{ねん}お^お茶^ちき^きん^んの^の顔^{かお}を^をま^まる^る
入^いり^りま^まる^るこ^こけ^けい^いと^とあ^あら^らま^まり^りま^まし^して^て眼^めを^をま^まる^ると^と涙^{なみだ}の^の露^{つゆ}を^をま^まる^る

化粧のせねども生海なまうみの雲うみの肌あはだの影かげと照あかりその顔かほも思おも
髪かみをあらうとあきど何なにとやらまご散ちりうまぬ花はなの香かほの中なか
あくとその思おもひつれ 案あん一いつあるむと感かんじ 入いる氣き性せいの生なま海うみもあ
ものご先達まへだちで文次ぶんじが命いのちをよととて葬まうふは方かたも使つかひ合あひ
まをのまや 流ながれ小こ眼めハきりけきど流ながる所ところも案あん一いつ番ばんを言いはせ
まこのいのみ一いつの不ふ実じつなる女おんなを悔くし〜思おもひこもそのいひも今いま
日ひ初はつして雲うみ落おちのけ身みをよま〜身みねてらるるのを考かんがへて
まると惚おぼれぬ 慈あわれ念ねんのとりあへ早はやくいふ浮うき海うみを捨すて置まけ
千代ちよ代よ十五いそ十五いそ

かんの表うら上のまゝ表おもてで娘むすめ子こどもの當あつ座ざの苑えんその素す人ひとの所ところ
あまをさしりやと遠とほくこお糸いとのはらこ文次ぶんじが恥はにかみ困こま窮きゆうを破やぶ
た第だい一いつのゆるりま〜とてまて考かんがへけ身みと捨すて置まけ置まけと男おとこへ
連引つらひせする心こころで眼めをとらておておておてその男おとこが死しねた盛さかの
花はなをま伊い人ひとち〜と其その姿すがた傾城けいせい奇人きじん傳でんとやういでも載のせ
らるる沙路さろぶが賞あづかることも案あん一いつ番ばんを言いはせ今いまの身みの上うへでお茶あ茶あ
も知し度どのころの夏なつサノ 一いつ五ご左ひだり後ごでいざうのませんよお茶あ
さんの中なか身み上のころ〜まのこのへ中なか本ほん右みぎの所ところをいざうのま

と世間でも情をしく居るはくそく多情流のあきさんごうら
何ふ分て心腹のゆきまが重なるて今の様よお困りのでござる
それヨ 家「左様思ひて呉さる御もがまひ振まのの先一通
の者へのくらのねえとら 御がまのさのりてさるのサ「他人
何とやてもおれ一旦お茶さんお苦勞の年季も核でお栗の
やとまごまごお我修の核のも聞ておりひさし大塚へうら
まらうら 渡へん死んでものをりばうはまひまうそめめを吊
ねまも 穿ちてけ安とあなしくも死して身まがわ残お茶

まんのお影でござるまらうら 何卒私の罪ありがらんお茶でま
まらうけまご何ぞ相意あはさるまを恩人への 出来まら核
あて だれにまらト勤せ身といひまら 幼木くう里の方
半途ふりーあたるおを和てさすかおぬらう情も言そく
まー女の誠厄の安ハのりけま 家「實は嬉しのけうご
けまごもけ通り 困窮の中ごうらまらく 彼と相談も
まらまご 獨身の淋しいのをねえ氣を分て苦くおとれん
僥倖へるひけまごも私うのまらぶ活業も 出来まらひはまご

うら 「ナニ子の困りておぼろふうのせうううく園まうこ
うら 二及六お困りくと思ひのせほま一とお栗のヤて推来
このせうまのヨとまごうう先刺もお栗入隣るも知れせん
と布ちままごううまのハ子トのめつ懐中よりおのこ
まの糸のゆるりの色も濃き括腰袋の中着入へうう 金銀
包しまく男の着まきかき 「昔ううお栗の二目り
三可の小まいよも不足ので有まはけままもす 内物氣のやん
と枚氣まのま一よと成てま下まも私もお栗さんの着物と

あて上るがうはまも 身ゆけもあるまをけりまうてけ
お金もお茶さんよまうう新屋の宅せ行付こそ私の着物を
拂ううう二代とあつたこのでお栗のうう他人ののちま
有ませんヨとまごうう有まはがが一のちのちまありませんう
色紙を押しけバ二十両も降まう 金女のあ
あ丹城の思ひあまをて神妙ま
家一そんなううまごううのち世はよる川このを思よあてとれま
まてふ夢落さば身をままう一尋ねて見逢ひでまてまこの

「サ侍さむらいくくくのの六むのの極ごく私わたしがが英えい埋まいとと冥めい意いをを尽つくるる極ごくで
 ありありままははけけききもも心こころ度どのの六む世よをを捨すててて姿すがたをを似にあ合あむむトトののひ
 ままろろ顔かほをを赤あかくくももてて泣なくく山やま声こゑゆゆりり ままろろ一ひとのの因いん縁えんももま
 様さまののああくくままでで愛あいささししののおお心こころががああららううととううてておおももんん 恋こひののひ
 ありありううののががああららううととままががおおももれれまませんんううととおおももれれままかかんん
 ありありううののをを不ふ実じつなな極ごくがが私わたしのの身みままのの幸さいひひととててままるるのの有あり
 ままははヨヨトトのの六む極ごくままろろ奥おくゆゆうう一ひとけけはは

○ままをを異いろろううがが柳やなぎ川がわのの表うらのの笔ふでのの極ごく意いととまま入いのの不ふ及あり

中ちゆう今こんのの奇き疾しやくままのの極ごく意いととまま入いのの不ふ及あり
 辰たつみ巳みののつつととてて新あらたままととてて及あり
 のの六む極ごく意いととまま入いのの不ふ及あり

又また曰いは此こゝ章しやう紙し才さい三さん編へんのの卷まきのの末すえ豊ゆほう月げつ亭ていののつつぎぎもも五ご編へん自みづから
 説とくあるる廿にじゅう六じゅうろくけけ四し編へんのの卷まき中ちゆうのの説とく疑ぎししううをを免まぬくくるる事こと

願ねがふふのの事こと

春色はるいろ英えい對たい暖ぬる語ご卷まきのの十二じふに

江戸戯作者

為永春水 

狂訓亭門葉

合 拔

為	為	為	為	為	為
永	永	永	永	永	永
春	柳	春	金	春	春
江	水	友	鈴	曉	蝶

江戸繪師

歌川國直 

